

崩れたイメージ

キューバには、長年、足を運んでみたいと願っていたが、ご縁をいただいて、この2月末から3月上旬にかけて歩いてきた。

キューバは有機農業大国で、都市農業によってかなりの自給をしているとのイメージを抱いてきたが、実際に足を運んでみてイメージと実態との大きなギャップに落胆させられた。ソ連や東欧社会主義圏が崩壊し、食料だけでなく、農薬・化学肥料等の生産資材まで枯渇し、農薬・化学肥料なしでの農業を余儀なくされた。結果的にほとんどが有機栽培で生産されることになったが、その後、農薬等の供給回復にともない多くは慣行栽培に戻ってしまった。ただ、この時の経験から編み出された、雨が激しく降っての土壌流出を防ぐために、コンクリート等の瓦礫で枠を囲んだ中に土壌を客土し、たい肥と混ぜて高畝で野菜を作るオルガノポニコ農場が、一定の普及・定着をみたことは間違いない。また都会の市街

地に農地を見かけることはまったくなかったが、日本でいう都市農業ではなく、都市近郊での農業が盛んであるというのが実情のようだ。

小農重視による自給的経済

こうした一方で、1991年10

し、これを支援していくことを明示するとともに、2008年には国内生産の増加によって輸入農産物の圧縮をはかるべく、遊休国有農地を意欲ある農業者に利用権を付与して活用させる政令を発令している。



月に打ち出された経済対策による、国営農場の規模縮小と、あらたな協同組合形態である協同生産基礎単位（UBPC）への改編、たくさんの市民等による「帰農運動」の展開。また1992年憲法では小農の役割を積極的に評価

このように社会主義国として農業への一定のコントロールは残しながらも、新規就農を促進し、小農によって自給力を高め、持続的循環型社会の一翼を担う存在へと誘導しつつあることは注目される。すなわち各国がこ

ぞって規模拡大を目指しているのとは反対に、自給的経済を目指し、その基礎として小農を位置付けている。

国民は安心・安全・安定を享受

キューバでは1961年に、基礎食料の配給制が導入されており、概ね必要量の20日分が低廉な価格で供給される。加えて教育費や医療費の無料化も続けられてきた。いくつかの調査によって子どもの学力水準は世界一であることが実証されていると同時に、教育水準も高く、「人材の宝庫」であるとも言われている。

キューバでは贅沢はできないが、食料にしても教育・医療等にしても暮らしの安定と安全は保障されており、また治安もいい。2015年にアメリカと国交を回復し、先行きは不透明で楽観は許されないが、格差は少なく、国民皆が安心して暮らしていくことができ、我が国とは方向性をまったく異にしながらも、真に「豊かな国」にずっと近いように思う。